

プロローグ

「家族とは何なのか？」

東京大学名誉教授
原島 博



■「家族」は人にとって最大の関心事

原島でございます。今日はお集まりいただきまして、ありがとうございます。このシンポジウムのコーディネーターをしております。その責任上、プロローグにタイトルをつけさせていただきました。「家族とは何なのか？」です。けれど、今このことについて結論を出すつもりはまったくございません。もしこの15分で結論が出てしまったら、このあとシンポジウムが続きませんし、次回も必要なくなってしまうから。

正直、この「家族」というのは、きわめて難しいテーマです。なぜかという、たとえば、わたしの家族にこの話をしたら、「家族のことをまったく考えてこなかったあなたが、どうしてそんなことをやるの？」と言われてしまいました。このように、常に“反省”がつきまとうテーマなのです。

また、家族というのは基本的に、自由に選べません。たとえば親子関係。子どもは「この親はいやだ」「この親のほうがいい」という形で生まれてくるわけではありませんし、親子関係は解消できません。夫婦関係は選べるではないかとお思いになるかもしれませんが、これもそう簡単には解消できません。解消できないから、いろいろ悩みがあるわけです。要するに、勝手に自由に選べないのが家族であり、したがって、家族はしがらみになると思われる方も、けっこういらっしゃると思います。

一方で、「家族は大切」「家族は絆」と思われる方も多いと思います。家族は、人が人と生活する最小単位です。家庭には自分の居場所があるという気持ちをお持ちで、ホッとすることもおられるでしょう。トイレだけが自分の居場所ではないのです。さらに言えば、自分たちはいいけれど、せめて子どもには、いい家庭で育ててもらいたいと願っている方も多いでしょう。

子どもを基準に考えたとき、やはり家族は重要です。

このように、家族は「しがらみ」でもあるし「絆」でもあるということで、前回のシンポジウムでは脚本家の山田太一先生に、「宿命としての家族」というテーマでお話いただきました。わたし自身、山田先生のお話をお聞きし、かつ、その後のパネルトークにも参加させていただいて、家族の問題というのは「こうあるべきだ」と上から目線で議論し、押しつける話ではないのだと思いました。人がそれぞれ違っていいように、家族もそれぞれ違っていいし、理想の家族なんてないのかもしれませんが、ただ、それだと議論はそれで終わりになってしまいます。では、なぜこのシンポジウムで3回にわたって家族をテーマにするのか。それはやはり、家族は人にとって最大の関心事だからです。

■家族のルーツにさかのぼって考える

家族とは一体何なのでしょう。どうして家族は最大の関心事なのでしょう。もしかしたら人間の遺伝子に、「家族の大切さ」というものが書き込まれているのかもしれませんが。あるいは、家族とは人間が作った社会的な仕組みだという面もあるかもしれません。それぞれの社会によって家族の形態は違うし、時代によっても違います。でも、家族が人間の遺伝子に書き込まれ、人間の本質なのだとしたら、家族のルーツとは一体何なのでしょう。遺伝子に書き込まれているとしたら、いつ書き込まれたのでしょうか。

そういうことを踏まえて家族のルーツにさかのぼって考えてみようということになり、今回、山極先生をお願いすることになったわけです。2003年に「社会の中の睡眠」というテーマでシンポジウムを行ないましたが、山極先生にはこのときにも、「類人猿の眠りと人の眠り」というテーマでお話いただきました。

今回、山極先生には「人間家族の由来と未来」というタイトルをつけていただきました。「ゴ



リラからAIまで」というサブタイトルがついております。実は京都大学の霊長類研究所に「アイちゃん」というチンパンジーがおりまして、最初わたしはそのアイちゃんの話かと思ったら、どうもAI（人工知能）ということでございます。現代社会におけるこれからの家族はどうあったらいいのか、果たしてこれでいいのかということまで、お話いただけるのかなと期待しております。よろしくご静聴をお願いいたします。